

翻訳と歴史——文学・社会・書誌 第十九号

(二〇〇四年一月三十一日発行)

白石家所蔵

森田思軒関係資料解題 (一) 川戸道昭

はじめに

昨年十一月九日、私は、森田思軒の生地である岡山県笠岡市において「森田思軒と慶應義塾」と題する講演を行った。笠岡市では、一九九六年の森田思軒没後一〇〇周年を機にこの明治の著名翻訳文学者に関する講演会を開催し、その何回目かの講師として私が招かれたという次第である。当日は、光栄にも、思軒の直系の子孫である白石静子さんと白石孝氏のご臨席を賜った。静子さんにとって、思軒は義理の祖父、孝さんにとっては曾祖父にあたる。すなわち、思軒の一人娘である下子しもこさんの長男・男也氏おなり(一九九三年没)の妻が静子さんで、孝氏は静子さんの次男という関係である。思軒の娘・下子さんが結婚したのが、早稲田派の作家で田山花袋に師事した白石実三であったことから、白石家は、近代日本文学史上に名を残す二人の作家の血脈を継ぐという、文学と

大変縁の深い家系となっている。

さいわい、私は、静子さん・孝氏と、講演の前後約三時間にわたって歓談する機会をえた。ここ十数年来強く関心を寄せてきた作家であるだけに、直系の子孫の方からさまざま興味深いエピソードを聞くことができるというのは、私にとってまさに身に余る光栄であった。講演のことは二の次にして、二人との会話に没頭した。そこで私が知りえた最大の情報は、散逸したとばかり思っていた思軒の遺品や書簡類が白石家に大事に保存されているという事実であった。その数は、無慮千数百点にも達するという。なかには、矢野龍溪からの書簡約八十通、小栗貞雄(矢野の実弟)からのもの約七十通、黒岩涙香からのもの七通等、私が最も知りたいと思っていた人々との交流のあとを裏つける貴重な資料も含まれている。これらの書簡類を丹念に読み解いていけば、思軒が、矢野に呼ばれて『郵便報知新聞』に入社して以降、そこを足がかりに日本の翻訳文壇に打って出るまでの過程が詳細にたどっていきけるにちがいない。必ずしも十分とはいえない思軒の作家活動を知る第一級の資料となるだろう。いや、一人思軒だけにかぎらない。生前思軒が培った、森□外、徳富蘇峰、幸田露伴、饗庭篁村、岡倉天心、市川団十郎、川上音二郎等々との幅広い交流のことを思えば、これらの資料が近代日本文学・日本文化の歩みをたどる

うえでこの上なく貴重な資料となることはまちがいない。実際、そうした人々から思軒にあてた書簡も数多く残されているのである。

思軒が明治三十年に三十六歳の若さで没してから百有余年。その長きにわたって、とよ夫人、下子さん、静子さんと、三代にわたってこれらの資料を守り抜いてこられた苦勞は、とても一言では語り尽くせないものであつたらう。

「戦争が激しくなつて母と一緒に思軒の遺品を防空壕に運びました。昭和二十年三月十日の大空襲のあとは、貨車を借りて実三の実家に疎開させました。」

昭和十二年に実三が亡くなり、男也氏が兵隊に取られ、残された未亡人・娘・嫁の女性三人で、激しくなる戦火の中を必死に思軒・実三の遺品を守り抜いたときの苦勞話を、静子さんは私にそ



思軒と娘下子、とよ夫人
(白石静子氏所蔵)

う話してくださつた。

当時は、とよ未亡人もいまだ健在で、静子さんはその手を引きながら、母の下子さんとともに実三の実家である群馬県の

安中町に難を逃れていったのだという。

「私はとよに足かけ四年仕えました。祖母がいつも口にしてきたことで、今も記憶に残るのは、白紙の紙なら、すぐに捨ててしまつてもかまいません。しかし、そこに一字でも書いてあつたら、決して捨ててはなりません、ということでした。ああ、作家の家にお嫁に来たんだな」と、つくづく実感いたしました。」

若くして亡くなつた夫の遺品を必死に守り抜こうとするとよ夫人の気持ちが届いほど伝わってくる。その志を、母とは一卵性双生児のように仲が良かったという娘の下子さんが受け継ぎ、さらに、それを下子さんの長男の嫁である静子さんが受け継いだ。

このようにして今日に伝えられたのが、白石家所蔵の千数百点におよぶ思軒の遺品や資料である。そこには思軒の魂が宿っている。同時に、思軒の没後、百年にわたつてそれを守り抜いてきた三人の女性の魂が宿っている。これは、最初から、百年の時空を超えて、今の世に伝えられる運命にあつたのだ。そう考えるのがどうも自然であるように私には思えてきた。私は、静子さんをお願いして、それらの資料の一部を公開させていただくことにした。

思軒の講演が、思わぬ方向に発展することになつたが、これもきっと何かの縁にちがいない。早速、東京久留米市にある白石家を訪れて、それらの資料を拝見させていただいてきた。現在、思

軒関係の資料の大半は笠岡市のほうに寄託されていて、白石家には写真類や原稿類・書簡類のごく一部しか残されていない。しかし、それでも私にとって未見の資料がかなり含まれていた。以下、随時、本欄においてその資料の紹介を行っていくことにする。

今回は、第一回目ということで、とよ夫人の「思軒一代の苦難」と題する思の出話を紹介することにしよう。これは『郵便報知新聞』明治二十八年『報知新聞』と改称が、昭和七年九月に、創刊以来二万号を数えたのを記念して掲載した特集記事の中にみられる一篇で、ほかに徳富蘇峰の回想記と村井弦斎（明治二十八年編集長に就任）の未亡人の談話が載っている。いずれも、『郵便報知新聞』の歴史を知る上で大変貴重な資料といえるものだが、なかでも、とよ夫人の思の出話は、思軒が、村上浪六や村井弦斎、原抱一庵、遅塚麗水といった門下の筆の力を結集して同紙の経営危機を乗り越えていくときの状況が克明に描かれており、単に『郵便報知新聞』の歴史ばかりか、近代日本文学の歴史をたどる上でも大変貴重な証言といえることができる。この思の出話が掲載された『報知新聞』創刊二万号の特集記事というのは、同紙の朝刊ではなくて夕刊に掲載された記事で、今日ではなかなか人の目にしがたいものとなっている。とよ夫人が大事に保管していた新聞切り抜きの中に見つかった資料で、「白石家所蔵・思軒関係資料紹介」と題す

る本欄の第一回目をかざる資料としてまさにうってつけの資料といえるだろう。

* * * * *

妻子と別居して

思軒一代の苦難

報知非常時に処した男の意地

とよ子未亡人の思ひ出話

廿四年の非常時

思軒居士が卅七年の短い生涯を通じて、最も悲壮な気持で闘ったのは明治廿四年の報知瓦解の時でした。それまで報知に立こもつて色々立派な仕事をしてゐた人達も相ついで退社してしまひ、報知にゐて財を成した人達もまるで社を顧みなくなつたのです。新聞社はその時六万円の負債をしょひ込んで、二進も三進もならなかつたのです。その頃の六万円といへば大金でした。最早かうなつては廢刊して、新聞社をつぶしてしまふよりほかに仕方がないといふことになりました。しかし廢刊して、社屋や機械を売つても四万円位しか金は出来さふにありませんでした。さうなるとあとの二万円はやはり負債として残り、誰かゞその責任を負はなくてはなりません。

どうせ社を潰してもやりくりがつかないといふのなら、もう一度ふん張つて報知を良い新聞にし、昔の隆盛時代にかへさう、それよりほかに取るべき手段はないと、思軒居士は考へたのです。

死を賭して闘ふ

そして思軒居士は妾むすめに申しました。

『おれが天下の思軒として今日あるのは全く報知のお陰である。

その報知が生きるか死ぬかの悲境にある時、どうしておれが見捨てるのが出来よう、見捨てゝは男が立たぬ。そこでおれは死を賭しても報知のために闘ふ積りだから、お前達もその覚悟をしなくてはならぬ』

そして私達の上に悲しい日が来ました。いままで住んでゐた根岸の家——お金の有難味なぞまるで意に介しないで豪奢な生活のすきだつた思軒のことで、その頃にもう電話まで引いて、女中や乳母や書生や車夫や、大勢の雇人をおいて賑やかに暮らしてゐた——その家をたゞんでしまひ、思軒居士は一人で薬研堀の新聞社の物置のやうな二階に寝泊りすることになり私達家族はさる人の紹介で大森の題目堂だいもくどうといふ破れ寺に寄遇きぐうすることになりました。女中も書生も車夫もみんな暇をやつて赤んぼあかぼ（現在の白石実三氏夫人のために乳母一人伴なつてそのお寺へ引移つたのです。そこへ行つてから聞いたのですが、その題目堂といふのは、小塚

ツ原あたりで斬首になつた罪人のどくろを葬るところださうで、私達は身の毛のよだつ思ひをしたのですが、さりとて身を寄せるところもなく、じつと我慢しなければなりませんでした。

お魚も買へずに

初め、矢野文雄さんのお家へおいて頂くといふ話も出たのですが思軒は『矢野さんのところは眷属も多いし、迷惑をかけては相済まぬ』といつて承知しなかつたのです。さて、題目堂に入りはしましたが、そこで雨露だけはしのぐことが出来ても、思軒は一銭もお金といふものを送つてくれませんので、日々のお米にさへ困りました。その頃五十銭出せば四、五升のお米は買へたのですが、その五十銭はおるか、四銭のお魚を求めることさへ出来なかつたのです。お払ひが滞るので米屋もだんだんいふことをきかなくなります。ある日のこと、どうした訳か、こちらの注文を米屋は非常に安請合ひをして、早速お米を持つて来て呉れましたので非常に喜んでゐると、すぐあとから件の米屋がやつてきて『いまのはほかのお家と間違へましたんで。へい、すみません』といつて、おひつから今持つて来たお米をずんずんあけて持つて行つてしまひました。しかし、その年はおなすが大変安くて、一銭買ふと六十ばかり来て、おなすばかり食べてゐたといふをかしい思出もあります。

思軒が無言の涙

一方思軒居士は新聞社の二階に泊つてゐるのですが、その寢床が鉛版をとかず工場の丁度真上にあたつてゐるので、夏のことですから夜も暑くて中々寝ることが出来ません。それで、毎晩両国橋の橋の上で鉛のさめるまで待つて、時分を見計らつてやつと寢床にもぐり込んださうです。

思軒は題目堂へ一週間に一度づゝ、大概日曜日によつて来ました。私達がどんなにか金にこまつてゐるのを見ても、そのことについて一言もいひません。思軒といふ人はどんな場合でもお金の話をするのが嫌ひでした。しかしその破れ寺で私達がどんなに苦しい生活をしてゐるかはよく分つてゐるのです。あの癩癩持のきかん気の思軒居士が、私達を見て、無言のまゝ、ポロ、ポロと涙をこぼしてゐるのを私は見ました。

大森へやつて来るにも、思軒は車賃にさへ窮した程で、勿論新聞社からは一銭の給料もとりはしなかつたのです。それ程の場合でありながら、思軒はよそに文章を書いて一銭でも儲けるといふことをしませんでした。

『この非常な場合に、よその仕事をしてゐる暇なぞはない。』

といつて、一意専心社のごとくに頭を使つてゐたのです。さふいふ片意地が思軒の思軒ところだつたと思ひます。

再び隆盛に向ふ

かうして編集の方は思軒居士が全責任を負ひ、会計は西洋から呼び戻された小栗貞雄氏が引受けてこの二人が、こん身の力を合はせて報知の頽勢を挽回しようとしてつとめたのであります。

思軒は先づ明識有能な記者を招かなくてはならぬと思ひ、幸田露伴氏に話をしたのですが、露伴氏は何故かウンといはなかつた。恐らく同氏が後に『国会新聞』に入られた点から推して、その方面の關係から思軒の勸説をしりぞけたのだと思はれますがそのために思軒は親友露伴をどうとも思はず、またいひも致しませんでした。そして露伴氏の代りに入社させたのが遅塚麗水さんでした。たしか七円の月給だつたと覚えて居ります。つゞいて村上浪六氏を社員として三円の給料を払ひ、日曜付録に初めて小説『三月月』を掲載しました。その小説の上欄には、思軒と弦斎の二人が評を書き、この評と小説とが相まつて『三月月』は非常な評判になるといつた工合で、報知は再び世間の人気を博し、徐々に隆盛發展の時代へ向つたのであります。

* * * *

【資料解題】

私がこの回想記に注目する理由は、一つには、同じ苦難を思軒自身が記録した文章が残されているためである。ある一つの出来

事を、作家自身が記述した文章と、それをかたわらで見ていた妻が描いた文章が残されているということは、それを比較照合することによって、作家の人となりや文章の傾向を知る重要な手がかりとなる。とくに、思軒のように、おのれの心中をストレートに語ることの少なかった作家の内面を検証するにはまたとない貴重な資料ということになるだろう。

たとえば、同じ大森の題目堂への転居の一件を、思軒自身の目を通すとこんなふうになる。

《大森の題目堂を半ば分^{かん}口^{くち}して避暑の台となし土曜日の夜より月曜日の朝まで輒^{すなわ}ち此に眠食す》（雑誌『国民之友』明治二十四年八月十三日）

要するに、寺の一部を借り切つて週末を快適に過ごすための別荘代わりに使用したというのである。ここからは、思軒の胸中に宿された苦難のことなど、少しも伝わってこない。まるで市井にまぎれる隠者の心境をしたためたかのような文章である。この冒頭の一文のすぐあとには、近くの魚市場に朝早く出かけていって、新鮮な魚を二、三購入する、という描写がみえる。実際は、魚をかう金にさえ窮していたはずなのに、そんな様子などまるでみら

れないのだ。旭光が海を照らし、軒をわたる風がなんとも心地よいと、あくまでも超俗の姿勢が貫かれている。新鮮な魚に舌つづみを打ったあとは、おもむろに床几を清めて西哲ペーコンの全集をひもとく。あるいは、墨を擦って好きな言葉を書き写す。そして、最後に、こう付け加えるのだ。「若し団十郎菊五郎の芝居さへ到地にあらば吾が履は復た城中の土を踏まざるも可なる」を、と。

これこそまさに思軒の真骨頂といふべきものだろう。真の趣味人としての思軒の面目が躍如としている。彼は、どんなときでも、私的な苦境をストレートに表現するような作家ではなかった。一世「一代の苦難」に見舞われながらも、「小塚ツ原あたりで斬首になつた罪人のどくろ」を葬る破れ寺を「避暑の台」に見立てて、しばし超俗の世界に魂を遊ばせるといつた「心のゆとり」を失わない作家であつた。

しかし、そんな趣味人たる思軒も、実生活をのぞいてみれば、人と変わらぬ大いなる苦難を抱えていた。報知社が作った二万円の負債を一身に背負つて、なんとかそれを返却しようと死にものぐるいでもがいている。「おれが天下の思軒として今日あるのは全く報知のお陰である。その報知が生きるか死ぬかの悲境にある時、どうしておれが見捨てることが出来よう」か、「死を賭しても報知のために闘ふ積り」である、と。

同じ思軒でも、読者に見せる顔と、家族に見せる顔とは、こんなに違っている。作家というのは、多かれ少なかれ、そんなものだってしまえばそれまでだが、思軒におけるこの公私のギャップは、普段われわれが見慣れていないものだけに、とくに新鮮に感じられる。大森の破れ寺を暑さを凌ぐ高台となし、生まれたびかりの赤ん坊（下子）を目の前にして、「物のあはれを知るは恋にあらず兒どもなり」と感慨をもらしてみせる。普段そんな表の顔ばかりを目にしている読者が、「あの癩癩持のきかん気の思軒居士が、私達を見て、無言のまゝ、ポロ、ポロと涙をこぼしてゐるのを私は見ました」という証言に接して、はっとなる。ああ、

冷静そのもののように見える思軒の心にも、これほどの熱き血潮が流れていたのだ、と。とよ夫人の回想記は、そうした人間思軒の心の底を透かしみることできる数少ない資料の一つといえるだろう。

それと、もうひとつ、この回想記が貴重なのは、それがジャーナリスト思軒の資質を知る上で欠かせない資料となっているためである。思軒は、明治十九年に翻訳文学者としてデビューして以来、一貫して『郵便報知新聞』を重要な作家活動の拠点としてきた。その拠って立つ新聞が廃刊の危機にさらされるのを目の当たりにして思軒がとった行動、それこそは、文学者・思軒の、編集

者・思軒の、さらには人間・思軒の真価をうらなう上で最も重要な試金石とみなすことができるものである。

思軒は、「生きるか死ぬかの悲境にある」『郵便報知新聞』をいかなる方法で蘇らせようとしたのか。それは、この回想記がはっきり示すように、村上浪六や村井弦斎、原抱一庵、遅塚麗水といった門下の筆の力を結集するという方法によつてであった。具体的には、『郵便報知新聞』の日曜版に、「報知叢話」なる付録をもうけ、そこにそうした人々の作品を掲載するという方法で難局を切り抜けようとしたのである。その付録が発行されるに先だつて、明治二十四年三月二十四日の『郵便報知新聞』には、次のような広告が掲載される。

《報知新聞／日曜付録 報知叢話 十二行三十字／三十二ページ
来る四月より毎日曜発行付録す。極で普通なる趣味より極で高尚なる理想に至るまで一切文学上の知識と娯楽とを編輯し、小説、逸話、隨筆、翻訳、詩歌、俳諧、手にまかせて採聚す。社友の玉稿を投せむことを約せられしもの既に少なからず。其の常住筆を執て編集に従事する者、凡そ左の如し。

抱一庵主人 ちぬの浦浪六 麗水生 弦斎居士 三峽学人（小栗貞雄） 思軒居士》

これをみてわかるとおり、思軒は『郵便報知新聞』をあらゆる「文学上の知識と娯楽」を満載する「文学」新聞となすことによつて売り上げ紙数の拡大をめざそうとしたのである。それはちょうど師匠の矢野文雄が、明治十九年九月に同紙の大改革を断行するに当たつて、「報知叢話」欄を新設し、そこに海外の翻訳小説等を掲げていったのと同じ試みであつた。普通『郵便報知新聞』のようないわゆる「大新聞（政論新聞）」には、「小新聞（一般向けの大衆新聞）」が売り物としてゐるような小説や翻訳等は掲載されない。この常識をうち破つて、矢野は「大新聞」と小説を結びつけた。それが見事に効を奏し、『郵便報知新聞』は、東京の新聞売り上げ順位の第八位から第一位へと飛躍的に発展をとげるにいたつた。「報知叢話」の最大の人気作家としてそれを自ら体験した思軒は、今回の危機に際して、その「大新聞」と「文学」の結びつきをより鮮明に打ち出すことで難局の打開をはかろうとしたのである。

おもしろいのは、そこに、矢野の亜流ではない思軒独自の創意工夫が見てとれることである。「報知叢話」は、「本紙月ぎめ読者に限り、毎月四回、斯の文学上の娯楽を享くるを得」とされていて、「月ぎめ」の読者はそれを無償で読めるが、そうでない者は「三

銭」出して買い求めなければならぬことになつてゐた。新聞一部が「二銭」とあるから、「月ぎめ」の読者にはかなりの恩典といえるだろう。

あとはその日曜ごとの新聞の付録をできるかぎり魅力のあるものにするだけだ。こうして呼び集められたのが、先ほどの広告の末尾に掲載された思軒門下の文学者たちである。本来ならそこに幸田露伴の名前も加わる予定であつたが、『国会新聞』に誘われていた露伴は同意しなかつた。その代わりに、いまだ無名の新人で、新聞の校正係を務めていた村上浪六が加わつた。その浪六が、露伴にも劣らない活躍をしたというのだから、思軒の文学的才能を見抜く力も相当なものであつたといえる。ちなみに、手もとの文学事典で浪六の経歴を確認するとこうある。すなわち、明治「二三年三月、郵便報知新聞に校正係として入社、翌年三月日曜付録『報知叢話』の創設に際し、編集長森田思軒の勧めではじめて浪六の名を用いて書いたのが『三月月』（明治二四・四六）である。これは発表と同時に非常に世評を呼び、二四歳の青年はいちじに文壇の寵児となつた。筆名のちぬの浦浪六とは幸田露伴の変名ではないかといわれたほどである」『日本近代文学大事典 机上版』講談社）と。

露伴に断られて、代わりに加えた新人が、露伴の「変名」と受

け取られるほどの活躍をしたというのである。まさに編集者・思軒の面目躍如といったところだろう。しかし、それだけではない。

とよ夫人の回想記には、新人の浪六を思軒と弦齋のベテラン作家が後押しして世に売り出していく様子がこう記されている。「つづいて村上浪六氏を社員として三円の給料を払ひ、日曜付録に初めて小説『三月月』を掲載しました。その小説の上欄には、思軒と弦齋の二人が評を書き、この評と小説とが相まって『三月月』は非常な評判になるといった具合で、報知は再び世間の人気を博し、徐々に隆盛発展の時代へ向つたのであります」。

新人の浪六が世に出るには思軒、弦齋らベテラン作家による後押しがあった。この記述から読みとれるのはそういうことだが、ここで一つ疑問に感じられるのは、『三月月』の上欄に掲載された「評」があつたと記されている点である。「報知叢話」をいくら調べてみても『三月月』の「上欄」に評は出てこない。そこで『郵便報知新聞』の復刻版を取り寄せて内容を点検してみると、確かに三面の冒頭に「報知叢話目次」が掲げられ、そこに「談益す佳境に入り来れり、治郎の侠勇、眉昂り、肉動く」（『三月月』四月二十五日）という式の評が載っている。確かにこれは思軒調だ。『三月月』の評が掲載されたのは付録の「報知叢話」ではなくて、新聞本体のほうであつたのだ。その評を思軒と弦齋が担当して、新

人浪六の後押しをしたというのが、とよ夫人の回想談が伝える真相である。

それともう一つ、『郵便報知新聞』には、「報知叢話『三月月』細評」なる文章が「うやむや居士」の名前で、合計七回、作品と同時進行的に連載される。それもまた、思軒か弦齋、あるいは、そのまわりの社友が執筆したものにはがいない。要するに、報知社をあげて、新人浪六の援護射撃をおこなつたのだ。その結果、二十四歳の青年浪六は、「いちじに文壇の寵児となつた」。同時に、『郵便報知新聞』は、「再び世間の人気を博し、徐々に隆盛発展の時代へ向つた」。まさに、編集者・思軒の企画力、新しい文学的才能を見いだす能力がもたらした一大勝利といえるだろう。

このように、とよ夫人の回想談は、普通の文学史をひもとくだけでは見えてこない大きな流れにわれわれの目を向けさせてくれる。それがかぎりなく貴重な点だ。村上浪六という作家は、「思軒の勧めではじめて『報知叢話』に『三月月』という小説を発表して、一躍文壇の寵児となつた」。そこまでは、一般の文学史を読むだけで十分に理解可能となる。しかし、問題はその先である。では、「報知叢話」はどうして生まれたのか。なぜ、思軒は浪六を登用したのか。その小説を売り出すために、なぜ、報知社の総力をあげてあと押しまでしたのか。とよ夫人の回想記は、これらの疑

問に答えるために欠かせない大きな視点をわれわれに提供してくれるのである。

思軒が「報知叢話」を創設したのは、ほかでもない、『郵便報知新聞』を「文学」新聞に変えることによって、再びもとの隆盛に戻そうとしたためである。「報知叢話」発行の背景には、あるいは浪六を文壇にデビューさせた背景には、そのような大きな意図が働いていた。そんなこととはつゆ知らず、私は、十数年前に「報知叢話」三十三冊を購入したまま、書庫にしまい込んで顧みずにした。それが思軒の汗と奮闘の結晶であることにはまったく気がつかなかったのである。その日曜付録が、明治二十四年十一月十二日に、三十三冊目のところで忽然と消えてしまうのをみても、なにか不都合があつて中止されたのだらうという程度にしか考えなかった。しかし、その中断の背景には、不都合などという生やさしい言葉で言い表せない、思軒にとつてまさに寝耳に水といえるようなある大きな事件が隠されていたのである。

それは一種のクーデターとでもいふべきものであった。「報知叢話」が突如中止される五日後の十一月二十七日の『郵便報知新聞』を見ると、「報知新聞大改良広告」と銘打った、こんな広告が載っている。

《本社今般大に社務を改革し、紙面の改良を行ひ左記の諸氏科を分ち、力を竭し、各々得意の技量を試みんとす。

藤田茂吉 箕浦勝人 加藤政之助 枝元長辰 田川大吉郎 犬養毅 吉田燾六 上東野富之助 村井寛 林九二夫 尾崎行雄 大石熊吉郎 町田忠次 遅塚金太郎》

右の外、社外各専門の諸大家に論説記事の寄送を囑托して、学術思想の普及を図り、凡そ政治、実業、法律、経済、理学、医学、哲学、文学等の諸科を始め社会全般の出来事を網羅し……特に帝國議會開会中は本紙の外、付録を添へて議事の顛末を詳報〔する〕》

ここには思軒の名はない。浪六も抱一庵の名も消えている。あるのは犬養毅や尾崎行雄というような「改進黨の豪傑連中」の名前である。そうした連中は、「新聞経営のまずいところから、改進黨新聞を次々とつぶし、党の機関紙ともいふべき大新聞は『報知』一つだけとなったので、やがて我も我もここへもぐり込むように」なった（柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』）。

なんのことはない、思軒が苦心して作ろうとした庶民のための「文学新聞」を、再び、もとの「政党新聞」に逆戻りさせる「大改良」がここで断行されることになったのである。「報知叢話」の突然の廃止と、それに取って代わる「帝國議會」の議事録の発行

に、その改革の性格が象徴的にあらわれている。もちろん、そんな時代に逆行する流れが世に受け入れられるはずはない。『郵便報知新聞』は、「犬養・尾崎らが明治二四年に……復帰してからは一層改進黨色を復し、それが益々同紙の不振をもたらす結果になった（西田長寿『明治時代の新聞と雑誌』）。

ともあれ、思軒は明治二十四年十一月二十二日の「報知叢話」の発行を最後に『郵便報知新聞』を追われた。しかし追われはしたが、去ってゆく思軒の心に、それなりの満足感がなかったわけではない。とにかく、身命をも賭す覚悟で、やるだけのこととはやったのだ。その一年ほどの奮闘のなかから「報知叢話」が生まれ、村上浪六という新たな流行作家が生まれた。読者の圧倒的な支持も得られた。思軒の名は陰に隠れて決して表面に出ることはなかったけれども、それはそれでよかったのだろう。明治十九年に翻訳文学者としてデビューを果たして以来、『郵便報知新聞』にはひとかたならぬ世話になった。その新聞のために恩返しはできたのである。

報知社を去るにあたって思軒の胸に去来したのは、おそらくこうした無念さと満足感が交錯する複雑な思いであったに違いない。しかし、その思いを伝える資料は、今日ではどこにもみあたらない。数年前に、某出版社が『郵便報知新聞』の復刻版を発行する

に際して作成した内容見本をみても、思軒の内面を伝える文章はおろか、思軒の「思」の字さえも見いだせないのである。とよ夫人の回想談は、そうした近代日本の新聞史上の、あるいは文学史上の欠落を補う意味で、またとない貴重な資料ということができるだろう。

明治翻訳文学全集《翻訳家編》

森田思軒集 I

【英国士官の物語／倫敦辻馬車／一シリング銀貨の履歴／千人会ほか『郵便報知新聞』『報知叢談』『国民之友』掲載作品25点収録】

解説 川戸道昭「初期翻訳文学における思軒と二葉亭の位置」 谷口靖彦「森田思軒の伝記を執筆して」

森田思軒集 II

【『郵便報知新聞』掲載のアプレイアス『金驢譚』ヴェルヌ『大水塊』『探検隊』収録】

解説 川戸道昭「若き日の森田思軒―矢野龍溪との交流を中心に」 加賀野井秀一「歴史はフィクションより面白い―森田思軒との出会い」

B 5判 上製 本文 350 頁口絵 8 頁 各巻定価 15,000 円＋税
ご注文はナダ出版センターまで。代金は本の到着後に、送料当社負担。

森田思軒の翻訳は、明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》の『ヴェルヌ集』I・II、『ユゴー集』I・II、『アーヴィング集』、『コリンズ集』、『ディケンズ集』、『ホーソーン集』、『ポー集』にも収録されています。

